

## **第 49 回宮崎海岸市民談義所 議事要旨**

日時：令和 5 年 3 月 3 日(金)19:00～21:15

場所：佐土原総合支所研修室およびオンライン

参加者：

□市民：18 名（うち、会場参加 14 名、オンライン参加 4 名）

□宮崎海岸市民連携コーディネータ：

吉武教授(九州工業大学)、高田准教授(兵庫県立大学)

□行政関係機関：

(国)宮崎河川国道事務所、宮崎海岸出張所

宮崎港湾・空港整備事務所

(県)河川課、中部農林振興局、中部港湾事務所、宮崎土木事務所

(市)建設部土木課、佐土原総合支所農林建設課

実施内容：

事務局より開会の挨拶、国、県、市、コンサルタントの出席者の紹介を行った後、高田宮崎海岸市民連携コーディネータ（以下「コーディネータ」）の進行により談義が進められた。なお、今回の談義所では新たな試みとして、会場での出席者に加えて、オンライン形式の参加も併用した。

まず、事務局より「宮崎海岸市民談義所の振り返り」として「コロナ禍での談義所等の開催概要」、「主な活動の紹介」、「第 48 回市民談義所(アンケート)の意見および回答」、「主な意見に対する回答の補足説明」を報告・説明し、これを踏まえて談義した。続いて「効果検証分科会及び委員会の結果報告」、「令和 4 年度以降の予定」を報告・説明し、これを踏まえて談義した。

※会議の開催前 30 分程度で、従前より参加している市民と初参加の市民との知識のギャップを埋めるとともに、市民談義所への理解を深めるため、来場者の質問に回答する相談窓口を開設した。

### **～「宮崎海岸市民談議所の振り返り」について～**

事務局より宮崎海岸市民談義所の振り返りとしてコロナ禍での談義所等の開催概要と主な活動の紹介について報告した。引き続き第 48 回市民談義所(アンケート)の意見および回答について説明し、談義した。

[参加者]

・将来の海岸を担う人たちも見据えて、海岸を担ってくれる人たちに海岸の大切

さとかをどのように届けていくか、山から海まで繋がりをどのように子ども達に伝えていくかを考える必要があると思う。

[コーディネータ]

・事務局として、出前講座やサポーターズのような取り組みを今後充実させて行くということで良いか。

[事務局]

・子ども達に対して事業を知ってもらう取り組みは進めていきたい。小学校にパンフレット・生きもの図鑑を配布した際に出前講座についてもアピールしたところであり、今後も継続していきたい。

[コーディネータ]

・出席者の皆さんの周りで、関わりのある学校、園や地域で海岸のことを学びたいという話が出たら、事務局に相談してもらおうと出前講座も展開していくかと思う。

[参加者]

・海岸線を映した動画の説明の中で、去年の台風でサンドバックが壊れたとの説明があったが、補修はするのか。

[事務局]

・サンドバックは高さが重要であり T.P. +4m と決められている。今回壊れたのは根固サンドバックであり、本体のサンドバックは高さを確保しているため補修はしない。露出したサンドバックに砂を被せる対応は行っている。

[コーディネータ]

・サンドバック設置当初はよく補修していたと記憶している。ここ数年は補修しなくてもよい程度の損傷になっているということか。このあたりの状況をもう少し説明して欲しい。

[事務局]

・昨年度以前は年間に数袋程度、補修をしていた。

[参加者]

・まず、3年ぶりに対面で談義所を開催できることに感謝している。事務局から海岸の現状や事業の進捗などについて説明があったが、3年前とあまり状況は変わっていないと感じた。また、令和9年度までの国土交通省管轄の事業と説明を受け、残り時間が短いと改めて認識した。海岸侵食の問題は全国で起きており、宮崎海岸の侵食対策事業が全国的な侵食対策のモデルになっていけばいいなという気持ちで意見交換に参加してきたが、残り時間が少ないということ踏まえ、これまでにこの事業に使った金額を教えて欲しい。

[事務局]

・宮崎海岸の侵食対策事業の総事業費は約230億円であり、現時点で概ね半分ぐらい使用している。

[参加者]

- ・台風の規模が変わっているなど前提条件の変化に対する海岸侵食への影響の検証が不十分であり、そのことで事業の収束に向かう道ができていないと感じる。

[事務局]

- ・「別紙 昨年度の地形測量・環境調査等の分析結果」を配布しており、この中に、波の強さ、高さ、周期や環境調査の結果なども掲載している。項目ごとに上限値、下限値を設定し、その間に観測した値が入っていれば条件の変更はないと整理している。毎年、新しい観測値で更新して確認しているが、現時点では懸念されるような大きく外れた観測値はないため、前提条件に関しては変わらない、と整理している。

毎年調査をしており、波の高さが設定している範囲から大きく外れて高い、周期が極端に短くなるなどの現象が確認できた場合には、前提条件を変える検討を行う必要があると考えている。ただし、現時点では前提条件の見直しは必要ないと判断している。

[参加者]

- ・第48回市民談義所のアンケートに「事業が進まないのであれば別の方策を考えるべきではないか」と意見した。漁業操業方法について先ほど説明があったが、操業方法が変えられないのであれば、突堤は延伸できないと思う。説明資料 p.20 には「現在の突堤は延長が短く効果も明確ではないため、見直しが必要と判断していません」と書かれており、違和感がある。

この事業は令和9年度までということだが、この事業の収束点はどこにあるのか。コンクリートで固めるのではなく、サンドバックにより柔らかい海岸ができており、この部分は評価できると思う。しかし、突堤が伸びていない状態でサンドバックに砂を被せ続けなければならないのであれば、今後どうしていくのか、ということを経験しなければならぬと思う。

[事務局]

- ・現時点で突堤を諦めたというわけではなく、いろいろ事務局内部で調整を継続し、突堤が延伸できるように議論している。

令和9年度が事業期間であるが、どうしても突堤が延伸できない、となった場合は、しかるべき段階で国土交通省・宮崎県で、突堤に代わる対策案を検討する必要が生じると考えている。

[参加者]

- ・今の突堤は短いですが、昨年頃から南側の宮崎港周辺では土砂が溜まりにくくなっ

ていると感じている。突堤の効果は今後見えてくるのではないか。

**[事務局]**

- ・宮崎港のマリーナでは毎年浚渫を行っていたが、今年はまったく溜まっていない。突堤の効果ということも考えられるが、原因はわかっていない。今後も状況を見守っていきたい。

**[参加者]**

- ・毎年冬は冬型の気圧配置が強まり、北風が強くなって南側に流れが出る傾向がある。しかし、今年に限っては、冬なのに南岸低気圧(九州の南側を低気圧が移動)により、北風が吹かない傾向が多く見られた。断定はできないがそういった気象が影響している可能性もあると思う。

**[コーディネータ]**

- ・談義所を開催できなかった3年間で、海底地形も含めて突堤の効果が表れているのか、それとも現状維持なのか、事務局から説明して欲しい。

**[事務局]**

- ・「別紙 昨年度の地形測量・環境調査等の分析結果」p.7に海底の地盤高の変化図を掲載している。平成24年～令和3年の地盤高変化図(図1)では突堤の沖側に顕著な堆積が確認できる。突堤の効果であるかは明確にはわからないが、この周辺は堆積傾向にあると考えている。

同資料 p.8 で一般的な土砂の動きを説明している。台風が来ると沖側に土砂が移動するが、台風が来ないときには岸側に移動してくる。令和3年は大きな台風が来ず、その結果として沖側の土砂が岸側に来て、p.7 図1のように堆積傾向になったと考えている。

また、2月に現場を確認した際には、突堤(堤長75m)の周囲に土砂が堆積していたことも踏まえると、突堤の効果はあると考えている。

**[参加者]**

- ・突堤の効果は否定しないが、堤長75mで海岸全体の砂浜を維持できず、堤長300mまで延伸して効果を発揮すると思う。事業期間が決まっていることも含めてよく考えて欲しい。

**[参加者]**

- ・砂浜を回復するためには(パイプラインによる)サンドバイパスが有効と思うので、それに関する調査もして欲しい。

**[参加者]**

- ・養浜200万 $m^3$ とはどのくらいの量なのか。また、その約200万 $m^3$ の養浜はどこに行っているのか。

**[事務局]**

- ・養浜1万 $m^3$ との規模感については、例えば10tダンプトラックには5.5 $m^3$ 積み

るので約 2000 台分になる。東京ドームはおおよそ 124 万 m<sup>3</sup>とのことなので東京ドームで例えると養浜 200 万 m<sup>3</sup>は 1.6 杯分になる。

養浜した土砂の行き先については、効果検証分科会や委員会の委員からも同様の質問があり、今後、定量的な検証が必要であるが、沖側に移動していることも考えられる。

**[参加者]**

- ・体感的には、砂浜の広い石崎浜や富田浜に溜まっているのではと感じる。事業期間は令和 9 年度までなので同じことを繰り返さずに取り組んで欲しい。

**[参加者]**

- ・談義所には最初のことから参加しており、当初から、土砂が流れ出るのを止めて欲しい、と言ってきている。また、養浜も動物園東の沖側で行っているが、石崎川の近くに投入すれば流れる間に岸側に寄って来るのではないかと。養浜する場所を考えてほしい。
- ・コンクリートの護岸を作ると土砂が流れない・出ていかないようにすれば砂浜はついて来るのではないかと。わずか 1km の区間のみが、サンドバックにより整備されていて砂が削られているので、この区間をコンクリート護岸にすればよいのではないかと。

**[事務局]**

- ・今の計画は、コンクリート構造物を極力減らすことを基本としている。土砂が流れていかない対策は考える必要があるが、今すぐにコンクリート護岸にするということは考えていない。

**[参加者]**

- ・今の計画で突堤 300m と決まっているが、そこに至るまでに様々な市民の方の意見を聞いた上で今の計画になっている。宮崎海岸トライアングルにおいて、市民がどこに携わったのか、どんな意見が出たのかということのを再整理して示すと良いと思う。検討当初は堤長 300m のヘッドランド 7 基であったが、市民の方から、小突堤、千本杭、砂すき工法など、いろいろな対策が提案され、それらも検討したうえで今の計画になっている。この検討してきた過程・経緯を皆で共有すると、理解が深まると思う。

**[参加者]**

- ・この事業の事業期間は令和 9 年度まで、と説明があったが、事業が完成する・しないに関わらず、県に移管されるということか。突堤 300m 延伸は令和 9 年度までには無理なのではないか。

**[事務局]**

- ・令和 9 年度までに今の計画で考えている突堤延伸と養浜をすべて終えてから県へ移管する、と考えている。

[参加者]

- ・最近、突堤の際に巨石が置かれており、石のサイズが年々大きくなっている。あの場所に置く石はどのくらいの大きさにするつもりなのか。また、どのくらいの範囲でいつまで巨石を置くことを考えているのか。昨年、子どもがけがをしたこともあり気になっている。

[事務局]

- ・投入する養浜の粒径は人頭大程度未満と決めている。今年については、一番南側の突堤には、大淀川の市役所周辺の河道掘削土砂を投入している。2月からは、やや大きい粒径の本庄川の河道掘削土砂を投入している。

[参加者]

- ・いろいろな経緯や事情があるのはわかるが、何をターゲットにして事業を完成とするのかを明確にするとよいと思う。

[参加者]

- ・一番の問題は砂が付かないことだと思う。何百年という長い時間をかけて、自然の水の流れが岩盤を削り、一ツ瀬川の河口から土砂が流れ出てきて砂浜を作ったと思う。しかし、元に戻すためにダムを壊すわけにはいかない。それに代わるものとして養浜するしかないと理解している。

[コーディネータ]

- ・川から流れてくる土砂をどう増やすか、というところを議論しないということ、それができないのであれば、養浜により海岸に流れる土砂の量を増やしていくことを考えないといけないという重要な指摘と思う。海だけではなく、川との一体的な総合土砂管理を議論していくこともこれからの重要なポイントであり、既にその取り組みも始まっており、加速していくと思う。

**～「効果検証分科会及び委員会の結果報告」、「令和4年度以降の予定」について～**

事務局より第11回効果検証分科会(令和4年10月開催)、第21回委員会(令和4年12月開催)の結果報告、令和4年以降の予定について説明があり、これを踏まえて談義した。

[参加者]

- ・先日、県主催の説明会があり、宮崎海岸については「漁業者が突堤整備に合意してくれたら、すぐ突堤を伸ばせるようになる」との説明を受けた。簡単には

突堤は伸ばせない、という今日の説明であったが、どのように理解すればよいのか。

#### [事務局]

- ・漁業者との合意ができていないため突堤を伸ばせない状態であるが、合意ができて予算確保などの手続きもあり、すぐには伸ばせない。国と県での情報共有を今後はしっかりとしていく。

#### [参加者]

- ・綾北川の最上流の発電所付近で土砂が多く削られていた。この土砂は大淀川に流れてきているのかを調べるようなことも必要かと思う。
- ・山から海岸までの繋がりを、遠足でもよいので子どもたちを連れて行って見せたり繋いでいくと良いのでは。

#### [コーディネータ]

- ・川で発生した土砂の行き先なども必要に応じて整理・提示していただきたい。

### ～コーディネータのまとめ～

#### [コーディネータ]

- ・令和 9 年度で国土交通省の海岸侵食対策事業が終わるということについて、「令和 9 年度はもうすぐではないか」、「工事が完成して引き継がれるのか、それとも令和 9 年度になったら即終了するということか」という懸念が挙げられたが、事務局より「基本的に当初の計画が実行された上で県へ移管する」と回答があった。ただし、県へ移管するにしても、これからどういうふうにかの海岸を継続的に議論していくのかが、参加者の関心事であることが大きなポイントだった。

この海岸を継続的に議論していくことが大切なミッションになってくるので、談義所を含め、宮崎海岸の侵食対策事業の中で、令和 9 年度以降の進め方や、どこにゴールを設定して、何が達成されたらこのプロジェクトとしてオーケーとするのかというところの基準も、皆さんと共有しながらこれからの方向性を考えていくということが大事なポイントだったと思う。

- ・実施してきた事業の効果については、今日発言があった方の中でも体感として、溜まっているという人もいれば、全然効果が出ていないという人もいた。海岸を利用されている皆さんのふだん海岸と接しているときの感覚と、科学的な検証が合っているのか合っていないのか。合っていないとしたらどういうところが違うのかということも、談義所の中でしっかり皆さんと共有し、これからのことも考えるし、これまでやってきたことをみんなで見ていく作業が必要になってくると感じた。

- もう一つは、今やっていることはたくさんの議論の積み重ねの上でやってきている。事業も長くやっている中で、みなさんの議論や対話などの積み重ねにより今事業が動いているということも折に触れてみんなで共有しながら議論しないといけないということを感じた。50 回近くの談義所の議論の積み重ねの厚みというものを共有できる機会がこれから大切になってくるという意見もあった。
- 総合土砂管理や、山から海へのつながりなど、海岸の領域だけに留まらない議論をどのような仕組み、どのような場で議論していくのかということについて、とても大切な指摘があったとコーディネータとしては受けとめている。

以 上